

上げた声は、ときを超えて誰かの背中を押す

小川 たまか

2020年9月にオンライン上で行われた立教大学ジェンダーフォーラム公開講演会の中で、フェミニズムが変えたことについて上野千鶴子さんは、こう語った。「その第一は、性暴力に対する社会的な許容度が低くなったことです。女の人たちが変えてきたんです」。

本当にその通りだと思う。牧野雅子さんの『痴漢とはなにか ― 被害と冤罪をめぐる社会学』（エトセトラブックス, 2019）を読めば、日本社会が痴漢被害をいかに軽視してきたかがわかるが、それが少しずつ変わったのは、例えば大阪の御堂筋線事件（1988年）をきっかけに声を上げた「性暴力を許さない女の会」のような活動があったからだ。2018年に各都道府県に最低1カ所の設置目標を達成した性暴力被害者のためのワンストップ支援センターは、女性たちが1980年代に草の根で始めた活動がベースとなっている。

可視化されていないたくさんの性被害があることを知っていた女性たちと、そうではない社会との隔たりをひたすら埋めようとした先人の積み重ねの先に、2017年の刑法・性犯罪規定の大幅な改正や、その年の秋からの「#MeToo」がある。そして今も声を上げ続けている人がいる。私は性暴力に関して若い層からの声が増えているように感じている。週刊誌の「ヤレル女子大生ランキング」に大学生たちが声を上げ、記事の撤回を求める署名が4万人を超えたのは2019年のこと。今年は「本気の痴漢対策を求めます！」という署名を学生たちが始め、国会質問でも取り上げられた。セクシュアル・コンセント（性的同意）を広める活動は複数の大学で行われていて、刑法の「暴行・脅迫要件の緩和・撤廃」「不同意性交等罪の創設」「性的同意年齢の引き上げ」といった点に関心をもつ人は増えている。

上げられた声はずっと遠い未来にも届くのだと私は感じている。誰かの声は、ときを超えて誰かの背中を押す。すぐにその成果は見えないかもしれないけれど、今日の波は、数十年後を変えていくはずだ。



PROFILE

おがわたまか：編集プロダクション取締役を経て2018年からフリーライター。主に性暴力や被害者支援を取材。著書に『「ほとんどない」ことにされている側から見た社会の話を。』（タバブックス, 2018）。「Yahoo! JAPAN ニュース個人」などで執筆。性犯罪の無罪判決を取材した記事で「PEP ジャーナリズム大賞2021」現場部門のファイナリストに選出。